

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

## リンドウ *Gentiana scabra* Bunge var. *buergeri* (Miq.) Maxim. (リンドウ科 Gentianaceae)

秋、奥武蔵の山々を歩くと、日当たりの良い山の斜面などに薄紫色の可憐な花をつけたリンドウを見かけます。リンドウは本州、四国、九州に分布し、山地や丘陵地に生える多年草です。茎は中空で直立または斜めに立ち、草丈20～90cm、葉は対生し、披針形で先はとがり、全縁、基部は茎を抱き、花は9～11月に咲き、茎の頂きまたは上部の葉腋に紫色、稀に白色の花をつけます。根と根茎はとても苦く、竜の胆のように苦いことから、生薬名を竜胆(リュウタン)と言い、昔から、民間で食欲不振、消化不良、胃酸過多、腹痛などにセンブリと同様、苦味健胃薬として使われてきました。

竜胆には、苦味健胃作用があり、唾液分泌促進とともに胃液分泌を増加し、胃腸運動を強め、消化吸収を促し、また、膵液、胆汁分泌を促進することから、消化器の充血や炎症のほか、尿道炎、リウマチなどにも利用され、疎経活血湯(ソケイカクケツトウ)、立効散(リッコウサン)、竜胆瀉肝湯(リュウタンシャカントウ)などの漢方薬に配合されています。苦い成分はgentiopicroside (gentiopicrin)などのセコイリド配糖体で、胃液分泌促進作用、胃および腸管運動促進作用があります。現在、日本薬局方収載生薬「竜胆」の基原植物には、トウリンドウ、マンシュウリンドウ、トウオヤマリンドウの3種が規定され、日本に自生するリンドウはトウリンドウに、また、エゾリンドウはトウ



写真1 リンドウ(花)



写真2 リュウタン(竜胆)



写真3 リンドウ(花、真上から)



写真4 ツルリンドウ(果実)



写真5 フデリンドウ(花)

オヤマリンドウに含まれるものと解釈されていますが、リンドウやエゾリンドウを基原植物とする生薬の産出量は極めて少ないようです。

その他、つる性で花はあまり目立ちませんが、秋、真っ赤な実をつけるツルリンドウ *Tripterospermum japonicum* (Sieb. et Zucc.) Maxim. があります。子供の頃、あまりにおいしいので口に入れてはみたものの、味の記憶が全く残っていません。きっと、美味しくも苦くも無かったのでしょう。その他、奥武蔵の丘陵地では春、花の咲くフデリンドウなども見ることができます。

余談ですが、切り花として、よく用いられる“トルコギキョウ”は、実は北アメリカ原産のリンドウ科植物なのですが、日本に導入されたとき、花の色や形からトルコのキキョウとして紹介され、その名が付いたようです。